

近代日本の靈魂觀

—平田派国学者 鈴木雅之『撞賢木』^{つきざかき}を通して—

金本拓士

はじめに

これまで筆者は、「近代日本の靈魂觀」を考察する上で、大本教教義の理論構築に携わった浅野和三郎、そして出口王仁三郎の靈魂觀に影響を与えた本田親徳を取り上げ、さらにかれらが考える近代日本における神道系の宗教觀の源流とも言える平田篤胤の靈的世界觀を取りあげ、本誌で紹介をしてきた。¹⁾

この作業によって確かに平田の靈魂觀が、浅野和三郎、さらには現代の江原啓之の靈魂觀にまで通じていることが見えてきた。しかしながら、平田の『靈能真柱』で描かれる靈魂觀から本田親徳の靈魂觀の間には、直接結びつく程の共通性が見られない（特に一靈四魂の考え方について）。平田の考える靈魂觀が基礎となつて、本田の靈魂觀につながっていくまでには、その間を埋める形で平田派の国学者たちの靈感觀があつたのではなからうか。

そこで、本論文では、幕末から明治にかけて活動した平田派の国学者の一人、鈴木雅之の『撞賢木』を取り上げ、そこから平田篤胤から本田親徳につながっていくだろう霊魂観について見ていくこととする。

鈴木雅之については、次項で紹介するが、かれを選んだ理由として、かれがほぼ独学で平田派の国学を学びつつも、時流に流されず、また本居、平田の考え方でさえ批判をする客観的な視線で独自の神道論を展開していること。そしてかれの考え方の中に、本田の霊魂観につながるものが見てとれるからである。

鈴木雅之について

鈴木雅之（以下鈴木と略）について簡単にその来歴を紹介する。

鈴木は、天保八年（一八三七）下総国南羽鳥村（現在成田市）の農家に生まれた。幼き時より学問をたしなみ、農家の仕事を手伝いながら専心に学事に勤め励んだ。

両親の薦めで一度は結婚をしたものの、学問の道捨てがたく、離婚をして家を妹婿にゆずり、自らは家を出て同郷の歌人神山魚貫翁の門に入って詠歌の道を学ぶ。その後、高萩村石橋氏の許に数年厄介になりながら、地元の子弟を教えながら勉学に励んだとされる。

幕末から明治の世になり、明治政府が祭政一致を目指して神祇官制度を復活させ、大教院が設立されると、かつて神山魚貫の所で知り合った伊能類則の引きで、明治三年神祇官宣教使中講義生に任命された。しかしながら、かれはこれまでの心労が祟って、明治四年、突然の病により三十五才の若さで逝去した。（略年表参照²）

鈴木は、千葉の農家に生まれながら、その類い希な才能によって、ほとんど独学によって、本居・平田派に連なる国学を学んだ。またかれの才能はそれだけに留まらず、歌学から政治経済の分野まで及んでいる。（遺稿略

目録參照^③

かれの業績の多彩さについて、村岡典嗣は次のように紹介している^①。

彼は學問を分けて、神典学、歴史学、律令学、歌学、儒学、詩文学、佛学、蘭学、兵学、医学、卜等に分ち、神典学を主とした。……その学の儒佛蘭にも亘つた事は、著書によつても知られるが、殊に蘭学の実験的學風に比較的同情した事は、平田派の諸家と同じく、答難と称する一書では、西洋の學術の精確な事を稱へ、水火風土の四元説を紹介して、ターレス、アナキシメネス、エムペドクレス等の名を伝えた。

このように多彩な學的成果がある中で、かれの中心となる學問は、本居・平田から伝えられてきた復古神道（村岡は「古學神道」と書く）を本流とする神典学である。

そして、かれの神典学の特徴は前述したように多彩な學問的知識を吸収しながらも、「彼の古道説の特色は、儒佛の影響を脱するは固より、耶蘇教に對しても、表面的には無論、裏面的にも習合的傾向をとる事なく、本居平田の古學神道をそれ自らの中に於て發展させてゐる^②」と説明されているように、安易に漢籍、洋学の知識に影響されることなく、なおかつ彼独自の學問を作り上げたものである。

鈴木以外の平田派の國學者たちが、明治政府の意向に沿つて、天皇を中心とする神学を提示していったことは違ひ、鈴木思想は、ある意味平田派の本流を嗣いだものと考えられる。そのことについては、村岡が「彼にしてなほ長らへたならば、學識一層の圓熟を加へて、矢野玄道や福羽美靜の徒と、優に伍するを得たであらう。否之をその爲し得たところ丈について見ても、思想的には平田神道一派中、むしろ最高の段階に立ち得た一人と、

彼を見なし得よう。」⁽⁶⁾と評価していることから窺うことができる。

『撞賢木』について

平田派の古神道を引き継いだ鈴木⁽⁷⁾の代表作であり、その思想をよく知ることができる著作が『撞賢木』である。『撞賢木』は全五巻からなり、各巻内容は次のとおりである。⁽⁷⁾

卷之一 総説

卷之二 天神、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、伊邪那岐神、伊邪那美神（風神、木神、草神、

火神、金神、土神、水神、穀神）、天照大神

卷之三 須佐之男神、禍津日神、直毘神、大名持神

卷之四 魂、心、生、死、幽顕

卷之五 君、親、天、地、泉、皇國、外國、儒、佛、報應

鈴木が本書を執筆する動機として次のように述べている。

学問の道は、人間の眞理を辨へて、人たる道を盡し、生徳を全くするを以て大要とす、然せんには先其大本をしらではかなふべからず、……おほけなくも眞道本教を述て、其迷惑をさまし、相共に人たる道を盡し生徳を全くせんと欲す、故此著書あり⁽⁸⁾

『撞賢木』は、人間の真理、人たる道を明かにするために書かれたものである。その道について鈴木は次のように説明している。

凡世になりとなる萬物盡く、皆道によりて生り出つ、

道ある故に、世にある萬物は生り出たるものなり、

萬物生有故に道生れるに非ず、

……

いきとしいけるもの皆、道を行ふによりて活く、

世に生活するほどのもの、道を離れていけるものは更にあることなし、

……

辱カミシテなくも天神の高天原に坐まして布行せたまふ生成の道、是なり。

天神とは、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、天照大御神の四柱を申し奉れり^⑨

以上のように鈴木が言う「道」とは、儒教や仏教など説く倫理や修行の道筋ではなく、記紀に描かれる世界創造神である天之御中主神を中心とする四柱の神々によって造られた世界生成の道である。そして目次からも察せられるように『撞賢木』は、その生成の道を明らかにするために書かれたものである。

村岡は『撞賢木』の特徴として次の三点をあげている。^⑩

第一に「元來生成の变化たるに過ぎない死によつて、道がなくならぬとなした等、道の先天性及び永久性を説いた思想」

第二に「この道の觀念と連關して、彼の神學思想は、天御中主神の神觀に於て、古學神道の夫を究極せしめた」

第三に「本居によつて説かれ、平田によつて幾分補正された善惡相生説で、彼は明らかに否定した。即ち彼は生成の心は善であるとなし、善惡相對へては、善は正理で、惡は變である故に、惡の理は善中に含まれてゐる。」

以上の三点をまとめるならば、『撞賢木』の中で説かれている思想は、天御中之主神からすべての世界は創造され、その生成の道筋を「道」と言い、すべては天御中之主神から創造されているとする。それ故に惡は善から变化したものであると、性善説を主張する。そして、その考え方は本居、平田の神學思想を一步進めたものである。

『撞賢木』の靈魂觀

では、この『撞賢木』の中で靈魂をどのようにとらえているのだろうか。そしてその靈魂觀と平田篤胤の靈魂觀とどのように相違し、また後の大本教にどのような影響を与えたのであろうか。

まず、『撞賢木』の靈魂觀について見ていくこととする。

前述したように、鈴木が考える世界觀は、記紀神話から、創造主たる天之御中主神からすべてが始まり、世界生成への働きかけをする神として、高産巢日神、神産巢日神が顕れ、さらに、この二神によつて様々な神が生まれ、最後に伊邪那岐神、伊邪那美神が生みだされ、この男女二神から具体的な世界の形が生成され、様々な神々が生み出されていくのである。我々生命あるものも、上の二神から生み出された天照大神から、さらに生み分けられた存在であるとする。

鈴木は、神と生命あるものとの結びつきを次のように説明する。

此神の魂の妙用にて、二柱の産巢日神を生し、産巢日神の魂分れて、天地を生し神人を生ず、是によりて伊邪那岐・伊邪那美神生り、此二神の魂分れて、國を生し萬物を生ず、萬物の魂分れて各々子を生し、子より子と相伝へて、生成止ことなく今に至れり、^①

そもそも天神の大御心は、萬物の生成蕃殖をおもほしめす故に、其御魂の分れて生坐る伊邪那岐・伊邪那美神をはじめ奉り、八百萬神及青人草にいたるまで、ことごとくみなしかり、其は其所為を見て察知べし、^②

すなわち、この世は天之御中主の魂から生み分かれて生成されたものであると言う。そして、鈴木は、「魂は即ち神なり」と定義をし、神と我々の魂とは同じものであるとし、「神代の神はもとより神にして、其魂またなほ神なり」と説明する。さらに「体軀は魂の作為ものなる故、魂神靈なる時は、體軀いよいよ奇特なり、故神代の時は理もはら人と同くして、其所為いともく奇しく靈しく測りがたきことあり、是世人の疑ひ惑ふ所以な

り⁽¹⁴⁾」というように、神も人もその本質となるものを「魂」と考えているようである。そして、神も人もその姿形は、魂が造るところのものであるが、ただ神々の姿は、とてもありがたい姿であるとする。それに反して人の姿も、魂によって造られるのであるが、「人魂即神なれど、是を神代の神の魂にくらぶれば甚く劣れり、故其作為る体軀も神代の神に及ばざること遠し、爰を以て理全神と同じくして、其所為凡庸なり⁽¹⁵⁾」と説明し、神の魂と比べて非常の劣っているために凡庸なる姿をしていると考える。

先に書いたように、神と魂は同じであるということは、神々の魂にしても人の魂にしても元々は天之御中主神の魂が分かれて生成されたものである。一つの根源地としての魂が分かれて、子ともいえる魂が生成されるということは、親が子を産み、子がまた子を産むようなものであると鈴木は考えている。

魂は神なり、神は其霊を分てここかしこにまつれども、へることもなくかはることもなし、千萬に分祀るも同じことぞ、是にて魂の理を知べし、近くは人いくたり子を生も、魂を分つといへども、親の魂へることもなくかはることもなし⁽¹⁶⁾。

さて、魂の働きとして、鈴木は次のように説明をする。

気血を進退運動して体を保つは、魂の所為なり、其故は人身中にて最貴重なるものは、魂と心となるが中に、心はもはら体外の諸事に応ることを掌りて、体内の事にはあづからず、今其徴を挙むに、先嬰兒は其心また稚くて物を識別すること能はず、されど気血の用は大人とさしもかはらず、是気血の主宰別にありて、

心のあつからぬ証なり、また心疲勞れば眠る、されど氣血の呼吸運動かはらず、是また心のあつからぬ証なり、かかれば心は体内のことにあづからぬこと著ければ、氣血運動して体を保つは魂なり、故魂はなる時は、体死るぞかし⁽¹⁷⁾

人体を生かしているものは魂と心であるが、特に人の身体を維持する生理的機能は、魂の為すところのものであるとする。心については、後に説明するが、心臓を動くのも血流が流れるのも、呼吸をすることもすべて心が預かり知らぬことであり、すべて魂の存在によつて成り立っていると考える。よつて魂が離れることは死ぬことになるのである。

心と魂との關係

それでは心を鈴木はどのように捉えているのだろうか。

『撞賢木』では「心」の章で心について説明をする。

心は、魂の作るものにして、もとも靈しく、神なり、

心は魂の作爲るものなり、故魂は本なり、心は魂の所為にて生り、形とともに生成の事とり行ふものなれば、

姑く魂の作と云、かくいひてよく當れるにはあらず、さて

萬機に應りて、生成の職をなすものなり⁽¹⁸⁾

一般的に心と魂とは同じもののように考えるが、鈴木は心とは、魂によって造られるものであるとする。それはこの世に存在するものが魂による生成であるとするならば、当然のことであろう。

さらに心について、次のように説明を続けている。

さて其居所は胸腔中^{むね}あと見ゆ、其故は喜怒哀楽の情切迫れば、胸に徹へて痛ければなり、(むねは、本居先生の身根かと云るに随ふべし、身の主根たる貴重のもの、居所故に、然云しなるべし、体脈にては頭をおきては、胸を先貴重のところなる、其は病標の堅固なるを見てもしるべきなり)漢人も哀戚^{かなし}きときは胸を拆^とつこと昔よりありと見えて、詩禮などに見えたり、⁽¹⁹⁾

心の在りどころは、胸にあるとする。それは喜怒哀楽の感情が起れば、胸に痛みがあるからだとし、そして魂が心によつては動かしがたい肉体の生理現象を掌るとするならば、心は感情がわき出る所であると考えている。その心を作りだしたのが魂であるが、その心と魂との関係について、次のように説明する。

魂は幽に属故に、其作用心の智慮にて測知こと能はず、さるは既にもいへる如、身体を保つものは魂にて、気を呼吸し血を運動する作用、寢息の間といへども止ことなし是によりて身体は生活くなれど、其所為いかにも心の智力にて知がたきは、魂は則神にて幽に属き、⁽²⁰⁾

ここで、魂と心をそれぞれ幽と顕という二つの概念に分けている。この幽と顕は言うまでもなく、本居・平田の考える古神道の世界観の一つである。顕とは顕界のことであり、この現世のことをいう。また幽とは幽界のこ

とであり、この世を裏から支える目に見えない世界である。魂は幽界に属していることから、この世界から見る
ことができないが、我々の身体を生かしている存在であり、心の意識では観じることができないものである。
さらに心と魂について次のように説明する。

さて心は顯なる故は、眼にこそ見えぬ、其作用（喜怒哀樂などの情）色に顯れ聲に発ずいといふことなし、
又魂は滅ず亡ぶることなきを、心は生滅あり、（心の生滅ある由は次にいふ）是等皆、魂と心との差別なり、魂と心とかく差別
ありて、魂の作用は心の智にては知がたきを、心の作用は何ことも魂は知ことと見ゆ、其は心感動は魂も感
動にて知べし、心うごきて魂うごくは何を以て知といふに、昔より甚怨恨忿怒て、（はうらむ、いかるなど）死る人の魂、
神異をあらはして生時の仇を報せる例、藤原廣嗣が玄昉僧を引裂殺などはじめとして、此類枚挙にたへず、（21）

魂が幽界に属するならば、心は顯界、すなわちこの世に属するものである。その心の働きは直接目で見ること
はできないが、感情を司る働きをする。また魂は滅することがないのに対して、心には生滅があるとす。そし
て心は魂を認識することができないが、魂は心の動きを感じることができるとす。それは心が持つ感情は魂
にも通じ、心に残る感情はそのまま魂にも引き継がれ、人が死んでも魂はその怨念をもつて崇りをなすことがあ
ると考える。心はあくまでも魂から作られたものであり、魂が主であり心を従とす。

これまで述べたところを图示するならば、次のようになるだろう。

それでは、魂はどこへ去っていくのか。

平田の説では、先の『現代密教』第二十三号で述べたように、魂は幽界へ行き、そこで永遠に留まり、子孫を見守っていくと考えているが、鈴木を考える魂とは、創造神より分かれ生み出されたものであるから、身心が死滅した後は本源である天之御中主神の元へと帰って行くと考ええる。しかしながら、罪を犯し処刑されたり、あるいは事故によって死んだ魂は、禍津日神の影響のために伊邪那美神の穢き黄泉の国へ赴くことになってしまうとする。鈴木にとって黄泉の国とは本居宣長の説を取り、穢き国と考ええる。だが、魂は永遠にそこに留まるのではなく、いずれは本源へと帰っていくとされ、最後にはすべての魂は救済されていくのである。

神のみこゝろは甚寛裕なるものなり、魂は即神なる故にまた寛裕なり、且生成の業いまたをへぬ故に急遽ならぬものぞ、かくて其とききたれば、魂身をはなれて天にのほり、形用全く廢む、是真理の死なり、其時いたらず生成のこと遂ずして死ぬるは、伊邪那美神の御こゝろにして、禍津日神のみしわざになむある⁽²⁾

平田篤胤から鈴木雅之、本田親徳へ

これまで鈴木 of 靈魂觀を概観してきたが、ここで平田篤胤と鈴木雅之の靈魂觀の相違についてまとめてみるならば、鈴木 of 考える黄泉の国は、本居宣長が言うように穢き所であり、非業の死をとげたものが行く国であるが、平田は人が死んで永遠に住む幽界であるとする。よって、平田にとって魂は、いつもこの世と表裏一体となっている幽界にとどまり、子孫たちを見守っていくと考える。しかし鈴木は魂とは天之御中主から別れたものであり、

いずれはその創造主の元へと帰っていくものであると考える。

さらに、平田の著作にはまだ明確に示されていないが、後に本田親徳が説いた「一霊四魂」という靈魂觀の考え方が『撞賢木』の中で表われている。

はじめに、一霊すなわち「直霊」は「直毘神」からきている概念である。本田親徳は、「直霊」を「天地を直す皇神の御心を受けて生まれし人の直霊ぞ」と説明しているが、鈴木は「直毘神」について「此神はすべて世の禍ごとを直して、もとにかへしたまふ」と説明しているところから、あきらかに「直霊」は「直毘神」からきている言葉であることがわかる。しかしながら、鈴木においては、「直毘霊」は伊邪那岐神が禊ぎによって生まれ「禍津日神」の禍事を直すために生んだ神であり、この世の罪過を正す働きをする神として位置づけているが、本田はさらに、そこから、この世界を統括し正しく運行せしむ靈力体であると拡大解釈をしている。

「四魂」（和魂、荒魂、幸魂、奇魂）については、『撞賢木』の中で次のように説明している。

其魂の靈妙の作用も一ならぬ故に、其功德につきて、幸魂・奇魂・和魂・荒魂など称へ申せり、……作用ひとしからず、是を以て幸魂、和魂等の称あるなり、いで其奇魂とは、奇霊につきていへる名、幸魂とは幸くある方につきていへる名なり⁽²⁶⁾

平田の著作には、この四魂についての名称はあるが、四つの魂としてまとめて考えてはいないし、その特質さえも明言していない。しかしながら、鈴木は、これを四魂という一つのひとまとまりの概念としてとらえている。そしてそれらの特質は奇魂は奇霊（靈験等をさす）を、幸魂は幸いをもたらす作用を表す名称であると考ええる。

奇魂・幸魂とて各別にあるにあらず、作用につきていへるなり……幸魂・奇魂は、共に和魂の名にて、幸奇とは其徳用を云なり⁽²⁷⁾

また、和魂、荒魂についても

和魂は和柔の意、荒魂は強剛の意なること著し、

是皆魂の妙用中の一端を以て命なり、さて然別れては本魂各其徳を別にして、また一神の用を為たまへり、⁽²⁸⁾

と述べているように、この二魂も同様に魂の作用について名づけたものであると考えている。

この「一靈四魂」の概念が、後に本田親徳、またその思想が大本教の教義へと繋がっていくことが見て取ることができるとはなからうか。

まとめとして

以上、鈴木雅之の『撞賢木』に説かれている靈魂觀を見てきたが、そこには、本居・平田の神学を継承しながらも、鈴木独自の靈魂觀が構築されていることが見られた。さらに、それが後の復古神道に属する教義の中に継承されていたことが見て取れる。

平田派の神学が何故、後に大本教等の教派神道に受け継がれていったのだろうか。

本居・平田国学が明治維新の王政復古の思想的基盤となったことは、歴史の上からも言われてきた。確かに明

治政府成立後、国策として神道を日本の国教とするため、神祇省を復興し、国民教化のために大教院を設けた。その時、教義の基礎付けをした国学者たちは、平田派の学者たちであった。そこで大教院に祀られた神は天之御中主、高産巢日、神産巢日、そして天照の四柱であった。しかしながら、明治政府が考える天皇を中心とする神道を目指すためには、あくまでも天照神を上^上に置かなければならず、しだいにこの考えにそぐわない平田派の国学者たちは排除されていった。

また明治十年には、出雲系の神官から顕界の主宰者たる天照を祀るならば、幽界の主宰者たる大国主神も祀るべきであるとする異議がだされ、神道内で大論争になった。

その結果、大教院で祀った四柱は解体され、大教院そのものも崩壊していったのである。以降、明治政府は顕界の主催者たる天照神を中心とする宗教色が排除された儀礼中心の国家神道を推し進めていったのであるが、その裏では、そこから排除された宗教としての神道教義が教派神道へと引き継がれていったと言われている。⁽²⁾ その引き継がれていった教義こそ、天之御中主神を創造神や一霊四魂を中心として造られていった平田派神道の靈魂観なのである。

註

(1) 現代密教第二十一号(『スピリチュアルと心靈学』近代日

本における靈魂観―) 第二十二号(『近代日本における靈

魂観―古神道家本田親徳を中心に―)、第二十三号(『平

田篤胤『靈能真柱』における靈魂観)

(2) 略年表

天保8(1837)

下総南羽島村に生まれる。幼名一平。

天保14

平田篤胤没

(3)

遺稿略目録

(歌の部)『歌学正言』『歌学新語』『百體百首』『百體百首続

安政4 21歳

父清兵衛の生家より従妹を迎えて妻とするが、まもなく離婚。妹に家を譲り香取郡三倉村の平右衛門宅に寓居する。

神山魚貫に入門。伊能穎則と知る。数年後、三倉より香取郡高萩村の石橋伝右衛門(永成)方に移る。

慶応元年 29歳

文久・元治の頃より雅之の著述がはじまる。

元治の頃から高萩の石橋氏の許を去って香取郡鐮木村の医家平山昌斎の許に寓し、明治2年頃まで留まる。

明治2年 33歳

伊能穎則、東京に出て神祇官に仕う。雅之も穎則に招かれて東京に行き、伊能氏に寓す(大学校を開くのに招聘されんがため)。東京に出る前、すでに長谷川勇助の長女萬喜と、鐮木の医昌斎方にて結婚。

明治3年 34歳

十月七日、大学小助教を命ぜられる。大学校で孟子を教科書にすることの不可の議論ありし時、旧著『弁孟』を提出して認められる。

明治4年 35歳

三月十九日神祇官宣教使中講義生に任ぜられる。小博士任命の内意を受ける。四月二十一日、急に病の為に死去。

(伊藤)二九二頁〜二九六頁 略年表より抜粋

篇「類題八代選」「活語全圖」「詞の花筐」「類題清風集」「花のしべ」「客居偶録」

(道の部)『撞賢木』『大学辨』『中庸辨』『孟子辨』『論語辨』

『理学新論』『春秋賛義』

(経済の部)『治安策』『民政要論』『経国略論』

(伊藤)二八〇頁〜二八二頁

(4) 『村岡 神道史』 一六二頁

(5) 『村岡 神道史』 一六三頁

(6) 『村岡 思想』 三九六頁

(7) 以下『神道大系』より引用

(8) 『神道大系』 三三一頁

(9) 『神道大系』 三三二頁

(10) 『村岡 神道史』 一六三頁〜一六五頁までの内容の抜粋

(11) 『神道大系』 四〇五頁

(12) 『神道大系』 四〇五頁〜四〇六頁

(13) 『神道大系』 四〇一頁

(14) 『神道大系』 四〇一頁

(15) 『神道大系』 四〇一頁

(16) 『神道大系』 四〇五頁割注

(17) 『神道大系』 四〇二頁

(18) 『神道大系』 四二二頁

(19) 『神道大系』 四二二頁

(20) 『神道大系』 四一三頁

(21) 『神道大系』 四一三頁

- (22) 『神道大系』 四一五頁
(23) 『神道大系』 四二二頁
(24) 『現代密教』 第二十二号八四頁
(25) 『神道大系』 三八七頁
(26) 『神道大系』 四〇七頁
(27) 『神道大系』 四〇七頁
(28) 『神道大系』 四〇九頁
(29) 『村岡 續日本思想史研究』 三三三頁 「明治維新の教化統制と平田神道」 など参照のこと。

〈キーワード〉

鈴木雅之 靈魂 復古神道 一靈四魂 天之御中主神 近代

引用文献

- 『伊藤』 伊藤至郎 『伊能忠敬・鈴木雅之』 伊藤書店 昭和十六年九月十日
『村岡 神道史』 村岡典嗣 『神道史』 「日本思想史研究」 第一卷 創文社 昭和三十一年十一月
『村岡 思想』 村岡典嗣 「農村の生んだ二國學者鈴木雅之」 『思想』 第百号 岩波書店
『村岡 續日本思想史』 村岡典嗣 『續日本思想史研究』 岩波書店 昭和一四年二月
『神道大系』 神道大系編纂会 『神道大系』 「論說編二十七 諸家神道(上)」 昭和六十三年二月 精興社

参考文献

- 伊藤至郎 『伊藤雅之研究』 昭和四十七年十月 青木書店
桂島宜弘 『幕末民衆思想の研究』 二〇〇五年六月 文理閣